66 分、相手の巧みなシュートがゴールネットを揺らした（撮影・中野成博）

駒澤大学0－2専修大学

"ピンチ"を"チャンス"に

試合後、うつむきながら握手を交わす駒大選手達

２点目を決め喜ぶ専大の高山

流通経大戦の完敗から1週間。ここまで白星と黒星が交互につき、1勝2敗。上位争いに絡んでいく上で、是が非でも連敗は避けたいという状況でこの日の専大戦を迎えた。

試合は序盤から専大が主導権を握る。秋田監督の戦前の予想通り、専大の3トップとトップ下10番の攻撃ユニットは脅威となった。特に両ウイングの突破力を生かしたサイドの攻防で、駒大は完全に後手に回ってしまう。「SBをもう少し上げたかった」と言う秋田監督の目論見は崩れ、前半はほとんど攻撃に転じることは出来なかった。

後半も劣勢に変わりはなく、異なったのは失点という形で表面化したということ。66分、相手ボランチの攻め上がりからシュートを許し先制点を献上。85分にはサイドを突破され見事なミドルシュートを決められた。スコア2－0、専大に許したシュート数は実に25本を数えた。

率直に言えば、この日の試合から駒大が勝つ要素を見出すことは出来なかった。「これが実力」と鈴木主将が言うように、ここ2試合の完敗で現状でのチームの未熟さが改めて浮き彫りになった形だ。しかし、それは開幕前からもチームとして認識されていたこと。そうした厳しい中でも結束力で強い相手に挑んでいくという姿勢が今年の『駒大サッカー』のスタイルだったはず。秋田監督が昨季のインカレで用いた「ピンチをチャンスに」という言葉を思い出してほしい。ここ数年直面することのなかったこの厳しい現実は、紛れもなくこのチームを成長させるチャンスである。同時に、優勝を目標に掲げるチームとして超えなければならない壁でもある。

まずは選手の試合後の表情に注目したい。今季まだ見ることの出来ていない、「やりきった」という原点的な光景が見られるのなら、それはこの現実を切り開く突破口なのだろう。それこそが『挑戦者』であるこのチームの本当の意味でのスタートラインではないだろうか。

（星　宏樹）